ごん吉くんレポート
～南吉よもやま話～

第50回

明日への希望を託した詩

人類はこれまでにも多くの感染症と闘ってきました。南吉が5歳から7歳の頃にはスペイン風邪が世界中で猛威を振るい、戦後に特効薬が普及するまでは常に結核が日本人の死亡原因の一位でした。

南吉もまた早くから結核に苦しみ、29歳7か月で亡くなりました。4歳の時に亡くなった実母の死因も結核だろうと言われています。

当時、有効な治療法がなかった結核に罹（かか）れば死を意識せざるを得ませんでした。南吉は20歳で初めて喀血していますが、その兆候が表れた日の日記には「死ぬのは嫌だ。生きていたい。本が読みたい。創作がしたい。」（昭8・12・6）と怯える気持ちを綴っています。

結核の辛さは死の恐怖だけではありません。他人に感染させてしまう心配、職場を追われる不安、そして人々から避けられる孤独感も深刻です。

実際、岩滑の年輩者からは「畳屋（南吉の生家）の前は息を止めて通った」という話が聞かれます。また、亡くなる間際の南吉が安城高等女学校の同僚教諭に宛てた手紙では、皆が僕の病気を毛嫌いするなかで、あなただけは分け隔てなく接してくれたと感謝の気持ちを伝えています。

新型コロナウィルスの感染拡大以来、患者を出した家庭が世間から厳しい目を向けられ、患者を救うために必死に働いている医療従事者の子どもが差別を受けているという報道を目にします。

自分だけは、家族だけは助かりたい、そう思ってしまう弱さは人間誰しも持っています。しかし、その気持ちをむき出しにして誰かを責め立てれば世の中は分断されてしまいます。南吉はそうした人間の弱さを描き、この世を「無限の闇」（「蛍のランターン」）に例えました。その一方でランプや蛍を好んで描いたのは、その小さな明かりに、煩悩（ぼんのう）に囚われた〝無明長夜（むみょうじょうや）〟のような人生を照らす希望を託したからです。

その〝小さな明かり〟とは、ひとりひとりが自分のエゴの深さを見つめること、そして生けるものが等しく持つ命の尊さ、美しさに気づくことでした。そうすれば、互いに尊重しあう明るい未来を信じることができると考えたのでしょう。

そんな南吉の明るさが表れた作品は幾つもありますが、なかでも希望に満ちているのが19歳のときに『赤い鳥』昭和7年10月号に入選した詩「明日」です。作曲もされていて、新美南吉記念館では毎年7月の生誕祭で合唱する定番曲です。

この難局を乗り越え、「明日」を皆で大きな声で歌える日が早く来てほしいですね。

新美南吉記念館　遠山光嗣

「明日（あした）」

新美南吉

花園みたいにまっている。
祭みたいにまっている。
明日がみんなをまっている。

草の芽、
あめ牛、てんと虫。
明日はみんなをまっている。

明日はさなぎが蝶になる。
明日はつぼみが花になる。
明日は卵がひなになる。

明日はみんなをまっている。
泉のようにわいている。
らんぷのように点（とも）ってる。

みんなで「明日」をとどけよう！

新美南吉が未来への希望をうたった詩「明日」。新型コロナウィルスで先行きが見えず不安な今、おうちで「明日」を朗読して、ツイッターなどのSNSで発信してみませんか？

●映像ではなく音声だけでも結構です。ご自身で作曲して歌うのもOK。
朗読にメッセージやあなたらしいパフォーマンスを添えたら、
ハッシュタグ「＃明日をとどける」をつけてアップしてください。
●詳しくは、新美南吉記念館のホームページをご覧ください。

※編集後記はP8に記載

編集・発行　半田市企画課　〒475-8666 半田市東洋町二丁目1番地　☎0569-21-3111(代表)　FAX0569-25-2180
毎月1・15日発行(5月・8月・12月は月1回)　http://www.city.handa.lg.jp/　Eメール　kouhou@city.handa.lg.jp

情熱、蔵出し。半田市。

UD FONT 見やすいユニバーサルデザインフォントを採用しています。
QRコードは㈱デンソーウェーブの登録商標です。
VEGETABLE OIL INK 植物油インキ使用
印刷　中埜総合印刷㈱